

井上 智恵子 福島県会津若松市 七十歳

「お母さんは弱虫だけど、頼りにしてっから。」

「えー。でも、今は頼らんにけど、元気になったら今迄通り私が頼るよ。お父さん。」

平成二十六年四月。大病を患い、療養生活を送っていた夫との二人だけの会話。五月、六月――。庭の木々をじっくりと見たり、世話をしたりする余裕などなかったあの頃。

その木々の葉が色づき、秋空が眩しかったある日。二本の夏椿の間に佇み、笑顔で写真を撮ってくれと言う夫。左斜めに体を向け、右手に左手を重ね、それを膺の辺に留め置くといういつものポーズで待っていた。すぐ様シャッターを切る。お気に入りの庭石にも腰を下ろし数枚。僅か十分程の出来事であった。

それから八ヶ月。二人だけの会話も空しく先祖の待つ（彼の地）へと旅立ってしまった。

今年の六月、何とあの夏椿が満開。例年に見事な咲きっぷりに驚き倍増。緑の葉。クリーム色の五弁の花びら。その中央には多数の黄色の雄しべ。この三色が、何とも言えぬ美しさを醸し出し、私の心を和ましてくれた。天からの贈り物だろうかとじっと見入ると、あの日の光景が蘇り涙が止まらない。

距離が離れると、心も離れると言い切った人。確かにあの世への道程は遠いが、小さな庭に、心を繋ぐ大きな灯を残していつてくれたのである。折しも、六月十七日は夫の命日。

今、私は、夫の体験できなかった日々を過ごしながら、宝物の夏椿と共に、一日一日を精一杯生き、天寿を全うしたいと願っている。